

氏名	浦 山 あゆみ
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	第3458号
学位授与年月日	平成10年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学位論文名	『音韻須知』『問奇一覽』の音韻的研究
論文審査委員	主 査 教 授 大内田三郎 副主査 教 授 毛利 正守 副主査 教 授 山口 久和

論 文 内 容 の 要 旨

漢語音韻史の重要な書である『中原音韻』とそれ以降の韻書類は、これまでさまざまな形で研究されてきた。それらのあらわす音系が、中古音から近世音そして現代音へと漢語が変化していく過程に他ならないからである。とりわけ曲韻書は俗音（口語音）をあらわそうとしたものであり、当時の活きたことばの音韻体系を反映するものとして注目され、継承関係を明らかにすることを中心として研究されてきた。それら『中原音韻』系韻書といわれる曲韻書類は、いわゆる換骨奪胎型を採って継承関係を有し、それぞれの編纂目的と編者の基づく音韻体系に対応しながら変遷してきた。換言すれば、現実の口語音と既成書の骨組みをどこまで折衷するのか、その選択に拠る変遷といえるものである。

本論文は、この『中原音韻』系韻書に加えらるべき曲韻書を取りあげ、漢語近世音韻史における諸問題に新たな見解を加えんとするものである。『音韻須知』と『問奇一覽』における本格的な研究は、本論文が初めての試みであると思われる。

まず第1章「緒論」では、本論文の研究課題と目的を掲げる。

本論文第2章「『中原音韻』と北音系韻書」では『中原音韻』系韻書の変遷と継承関係を概観し、趙蔭棠氏ならびに羅常培氏の研究を軸に、その後の研究成果をも含めて北音系曲韻書におけるこれまでの研究過程を詳述し、新たな系統図に整理しなおして示している。

第3章「『音韻須知』について」と第4章「『問奇一覽』について」においては、『音韻須知』と『問奇一覽』を紹介し、両書の関係と作者を中心に考察する。両書は、清朝初期にペアで刊行された書物であり、その作者は戯曲に造詣の深い人物であることを考証している。そして、この二書はいわゆる『中原音韻』系韻書の系列に並ぶべき書でありながら、不当に置き去りにされてきた書物であることを確認している。

第5章「『音韻須知』音注をめぐる問題」では書誌学的見地から『音韻須知』の版本と底本について検証し、本書には数種の版本が存在すること、その底本が『重訂中原音韻』（葉本）である可能性が高いこと、そして本書の二種の版本（京大本と早稲田本）の反切が非常に異なっていることを指摘する。本論文では、これは漢語音韻史における大きな問題つまり未知の漢字音を如何にして導き出すかという、漢字自身が抱える問題から発せられた試行錯誤の結果であると考察する。そもそも漢字の注音法の中で最も簡明であるのは直音法である。しかし、『音韻須知』は直音法は採らず、すべて反切によって音注を付している点、注目される。本章ではその事由についても考察し、『音韻須知』と密接な関係を有する『問奇一覽』『切韻捷法』の影響、及び早稲田本の反切が単なる「訂正」ではなく、より合理的な反切へと「改良」が加えられていることも指摘したといえるであろう。

第6章「『問奇一覽』『切韻捷法』の由來」では『問奇一覽』所収の「切韻捷法」とそれに含まれる韻図部分の由来、ならびに既存の書物から受けた影響について検討する。本章では、「切韻捷法」は直截的に

は論曲書である『度曲須知』の延長下に属するものであり、その根底にある理論は等韻図と反切から求める音を導き出す方法（射標法）に基づくものであることも明らかにしている。そして「切韻捷法」が論曲書である『度曲須知』から多大な影響を受けていること、また、『問奇一覽』所収韻図が『度曲須知』の作者が抱いた理想、すなわち『中原音韻』音系に合致した韻図を形成すること、を転化させて作成されたものであると考えられることも、あわせて示している。

以上を承けて第7章「『問奇一覽』經緯圖音系」ではさらに「切韻捷法」所収の韻図声母を詳しく分析し、それらが南方とりわけ呉語的色彩を多分に帯びていることを指摘する。このことは京大本が、底本である葉本の反切を継承し、葉本同様に呉語的特徴を残存するという事実と連動する結果を導くものであり、第5章ならびに第6章で考察した論拠を補強するものである。

第8章「反切改良史からみた早稲田本」では韻書等において合理的反切へと改良が加えられてきた様相を概観している。そして早稲田本『音韻須知』の反切の特徴に触れ、反切改良史の殿軍といわれる『音韻闡微』の反切との比較を試みている。その結果、早稲田本と『音韻闡微』の反切に似通った傾向がみられ、全体的数値では比較的高い一致率を有していることを提示している。これにより、『音韻闡微』の反切作成原理が決して満州字母の影響にのみよるものではない可能性も示し得ているといえる。しかしながら両書の反切は決して全く同じというわけではなく、韻によって異同があることも確認されている。

第9章「反切の相違からみた『音韻須知』音系」では第8章で得られた数値の結果と、さらに京大本をも含めて早稲田本『音韻須知』の反切用字の特徴およびその音系の違いを考察し、『音韻闡微』の反切との異同を中心に検討する。そして、早稲田本の反切が必ずしも『音韻闡微』の反切を参照して改良されたものとは言いがたく、京大本の反切をそのまま援用している部分があることを指摘し、むしろ京大本とセットとなる『問奇一覽』『切韻捷法』所収の韻図を基として反切改良がなされたのではないかと推察している。

最後の第10章「結論」は本論文をまとめた部分である。

本論文は大別して二つの観点から漢語音韻史に新たな成果をつけ加えることが出来たと考えられる。一つは近世音韻史における継承関係をより明確にし、『音韻須知』と『問奇一覽』が加わることによって、葉本の影響がより大きい实际情况を指摘している。そのうえで『中原音韻』系韻書と呼ばれる曲韻書類は『度曲須知』に代表される論曲書からの影響も無視できない関係にあることを明らかにしている点である。もう一つは、『音韻闡微』の編者が実は既存の書、とりわけ曲韻書を参照していた事実を示し、その結果『音韻闡微』の反切が『音韻須知』早稲田本反切と比較的近似した反切を用いることも数値で示した点であろう。それはとりもなおさず『音韻闡微』の反切が満州字母の原理にのみ基づくものではない証左となりうるものである。本論文は近世音韻史という漢語史の一大課題に新しい視点——戲曲関係の書物の影響を考慮せねばならないこと、そして満州字母が反切改良史に与えた影響に対する疑問——を提示した論考と思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、清朝初期にセットで刊行された『音韻須知』と『問奇一覽』を取りあげ、その性格と特徴を解明し、漢語音韻史上の位置づけを試みたものである。

第一章は、漢語音韻史において重要な意味をもつ『中原音韻』を略述し、その流れを汲む『音韻須知』と『問奇一覽』の音韻を考察し、様々な観点から漢語近世音韻史の諸問題を解明しようとする本論文の目的を述べている。

第二章は、『中原音韻』の流れを汲む同一系統の韻書六種を取りあげ、各韻書間にどのような共通点、相違点がみられるか、韻の分類、韻目名、音注、義注など構成面から詳細に考察している。さらに、趙蔭

棠、羅常培研究成果を参照し、各種韻書を新たな系統図に整理しなおしている。

第三章、第四章は、『音韻須知』と『問奇一覽』を書誌学的に検討している。

『音韻須知』は、わが国に二種現存し、京都大学（『京大本』と略称）と早稲田大学（『早稲田本』と略称）にそれぞれ所蔵されている。この二種版本は、韻目、行数、字数など体裁はすべて共通するが、小韻代表字の下に示されている反切は異なっている。この点から、『京大本』と『早稲田本』は異版とみなしている。

『問奇一覽』は、明代の張位が著した『問奇集』を一部改訂した韻書と考えられるが、明代の著書『字彙』とも類似した点があり、『問奇集』が唯一の底本とは認めがたいとしている。

第五章は、書誌学的な見地から『音韻須知』の版本について考察している。『音韻須知』の『京大本』と『早稲田本』の二種の版本における反切が異なる理由について検討を加えたものである。同一韻書が版本によって反切が異なることは、他に類をみない現象である。これは漢字音をいかに表記するかという問題から出た試行錯誤の結果であるとし、『早稲田本』の反切がより合理的な改良を加えたために『京大本』と相違が生じたと結論づけている。

第六章、第七章は『問奇一覽』所収『切韻捷法』に含まれている韻図が『度曲須知』から影響を受けている事実を明らかにし、さらに、この韻図声母は呉語の色彩を帯びていることを指摘している。

第八章は、改良がほどこされた『早稲田本』の反切の特徴に触れ、上字は中古音の陰声韻に属する文字が多く用いられる傾向がみられ、下字の声母は牙喉音の割合が高いことを明らかにしている。さらに、『早稲田本』の反切と改良をほどこしている『音韻闡微』の反切を比較検討して、両者の反切が似ていることを明らかにし、その理由について論述している。

第九章は、『京大本』と『早稲田本』の反切用字の特徴およびその音系の違いを考察し、『音韻闡微』の反切との異同を検討している。『早稲田本』の反切は『音韻闡微』の反切と共通する部分も見られるが、『京大本』の反切をそのまま援用している部分もある。この点から『早稲田本』は、『京大本』とセットで刊行された『問奇一覽』所収『切韻捷法』の韻図に基づいて反切の改良がほどこされたと推定している。

本論文は、近世漢語の各種韻書を丹念に考察し、近世音韻史における音韻の継承関係を明らかにしている。また、従来、研究テーマとして論じられなかった『音韻須知』と『問奇一覽』の反切を他の韻書と詳細に比較検討して、その性格と特徴を明らかにし、漢語音韻史上の位置づけを明確にした点は評価できる。

今後の課題として、『中原音韻』系曲韻書の研究は、韻書の文献研究だけでなく、戯曲など文学作品の韻脚から当時の生きた語音を調査する必要がある。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。